

莊園公領制における莊司をめぐる存在形態

奥野義雄

〔抄録〕

本稿では、『日本史辞典』の「莊官」「莊司」の項の記述を契機に莊園公領制における〈莊司〉の存在は、辞典の記述と同様であるのかという疑問が湧き、〈莊司〉について検討することにした。そこで、古代・中世での莊司自体の存在形態の変化は在り得るものなのか、また古代・中世の〈莊司〉の職責は変貌したものなのか、そして莊官である莊司と預所・下司を同一視する身分である

ものなのかという疑問点を検討してきた。この検討で、古代の莊司自体とその職責は中世に至っても大きな変化をもたらさずに存在することを提示してきた。併せて、〈莊司〉が預所や下司と同一視できないことも言及している。

キーワード 莊園制、莊園管理・運営、莊司、莊官

はじめに

莊園の莊官として莊司が莊園管理・運営に従事している実態は、莊園公領制での莊園の展開や莊官による莊園管理・運営状況などの論究で窺える。

だが、莊司がいかなる莊官であり、どのような職責を担っていたものかなどの課題があるとともに、莊司にかかわる一般的理解を提示する歴史関係の辞典の記述にもいくつかの疑問点が抽出し得る。

そこで、次に二つの辞典の「莊司」と「莊官」の項目の記述をみていくことにしたい。

① 莊官と同義で、下司・田所・家主・専当など現地における莊園管理者の総称。

② 現地の莊園管理者の筆頭である下司のこと。

③ 在京して莊園を管理する預所

という記述されている(『岩波日本史辞典』(一九九九年一〇月刊行))。この辞典には、莊司は莊官と同義語であり、〈莊司〉は莊園管理者

の総称であると明示しているが、他方荘園管理者筆頭の下司であるとも、また在京の荘園管理者の預所とも言及されている。

荘司にかかわる三つの様相は、従来から論及されている荘司の存在を纏めたものであろう。確かに辞典形態からすれば、客観的思考を基に論及されている荘司の存在を示したものであるが、ここで荘司＝荘官総称、荘司＝下司、そして荘司＝在京預所という荘司の三形態が存在するものかという言及はされていない。

だが、荘司＝荘官総称、荘官＝荘司、荘司＝在京預所の三形態とも諸史料で実証されてきたとは言い難いであろう。

確かに、網野善彦氏が平安時代末期の武蔵国下河辺荘の立荘に秀郷流藤原氏一流の大田行政子息の行義が寄与し、自ら荘司＝下司となると論及¹⁾しているが、これ以外に荘司の形態がいくつあるかも明確でない。また、同氏は美濃国茜部荘の西堺係争地の実検に官使・国使・荘司らが立ち会²⁾うが、給田に下司給二町、目代給一町五反と表示されていることと重ね合わせて、係争地立会の荘司が下司ではないかと推察している。だが、この推察の荘司＝下司にかかわる〈証〉となる史料の提示はない。

ゆえに、この辞典で記述されている三形態の荘司の存在は実態として提示し得るとは言い難いと考えている。

次に「荘司」の項目はないが、荘司を含めた「荘官」の記述の項目を窺って、その要点を示すことにしよう。すなわち、荘官とは

- ・ 荘園の経営管理の実務に従事するものの総称である。
- ・ 荘の領有者によって任命された京、鎌倉で総括的管理にあたる預

所、雑掌を上司、荘園現地の荘家や荘政所で管理実務に従事する下級役人や荘官沙汰人などと呼んだのである。

- ・ 個別には、奈良時代の初期荘園では田令、田使、荘検校、荘司などと呼ばれ、一二世紀以後には下司、公文、田所、惣追捕使、案主などの呼称がある。

という記述があるが（『日本歴史事典』2、(二〇〇〇年一〇月小学館刊行)、単独の項目で荘司についてはほとんど明示されていない。そして、荘司が存在し、呼称されていた時期を平安時代に限定していること、上司である預所・雑掌の荘官とともに荘園管理・運営の実務者である下級役人・荘官沙汰人の荘官が存在して、〈荘司〉はこの階層に属することになることに對する提示には疑義を抱かざるを得ないのである。

なぜなら、荘官である荘司は平安時代に限定された存在であつたものかという疑問が生じる。また、下級役人・荘官沙汰人と呼称されていた荘官としての荘司はいかなる存在であつたものかは明らかではなく、荘官沙汰人とはどの荘官を対象にしたものか、あるいはすべての荘官を対象にしたものかもは、明確でないといえよう。

言い換えると、荘園管理・運営の実務を担う荘官である荘司——荘司が現われる平安時代以降に焦点を絞っている荘預、荘検校、下司、公文、惣追捕使などの多くの荘官の成員としての階層——が、いかなる存在かはつきり窺えない。そして、荘司は平安時代以降、鎌倉時代および室町時代に存在することがなかったのかという疑問点が生起されてくるかもしれない。

このように一般的解釈として提示されている荘司については、明確に示し得るほどその実態が鮮明になっているとは言えないことを表示していると理解できるとともに、辞典的表現の限界であるとも考えられる。

確かに荘園において、雑掌が〈荘雑掌〉であろうと推察されるほど荘園管理・運営の実務に力を注いできた事象は、多くの史料によって窺えるが、その状況とは異なり、荘司が荘園管理・運営の実務を担ってきた事象は目立つほどではなかった。

さらに、論究対象に組み込まれて荘司が言及されていることが多くあったとも言い切れないであろう。だが、このような状況で網野氏はさきの武蔵国下河辺荘の荘司大田行義以外に、近江国愛智荘々司、尾張味岡荘の荘司平時範、そして美濃国多芸荘（多芸嶋）の荘司頼助などについて論究³している。

また、戸田芳実氏も近江国愛智荘々司をはじめ、山城国玉井荘々司や筑前国杷岐荘（大石・山北両封とも）荘司について言及⁴している。

だが、さきに窺った〈荘司〉にかかわる疑義を解決するような論究まで及んでいないようである。

そこで、ここでは〈荘司〉が出現しはじめた時期からどのように〈荘司〉が職責を担っていたのかということと、〈荘司〉〈預所〓荘預〉〈下司〉とのかわりについての疑問点も検討していきたい。

だが、〈荘司とは何か〉という基本的な問いかけに明確な解釈を提示することはできないであろう。ただ、さきの疑問を解決する一端を担うことができたと考えている。

まずは、次に荘司が史料に表現されはじめた時期での存在について、諸史料から検討していくことにしたい。

第一章 臨時雑役と荘司・荘子

荘園成立にともなう荘園管理・運営に従事する荘官として〈預（荘預）〓後の預所〉の存在は周知されとともに、荘園管理・運営の従事者として荘官・荘司の存在も諸史料から窺える。しかし、荘司が荘園成立とともに存在していたのかは明確でない。

ただ、天曆五（九五二）年九月十五日付の「太政官符案」にみえる荘司が初見であると考えられる。すなわち、

太政官符 伊勢国司

・応為不輸租田醍醐寺所領曾祢莊并免莊司寄人等臨時雑役事

在一志郡

右、得彼寺去七月七日解状稱、件莊司可被免除租稅雜役之由、具注事狀、言上先畢、（中略）、望請、早被言上、給官符、全運納地子者、望請、任先解狀、早被給官符、免除租稅雜役、（下略）

という記載⁵があり（傍点―奥野、以下同様にて略す）、確かに醍醐寺領曾祢莊を不輸租田となすことと、荘司と寄人などの臨時雑役を免除することが明示され、この時期に〈荘司〉が存在していたことがわかる。つまり、九五〇年代には荘園に荘司がいたことが示され、現段階では〈荘司〉が史料に現われる初見といえよう。

この官符案をみるかぎり、曾祢莊の荘司は租稅雜役免除の対象にな

つていることが窺える。この事象の視点をかえると、もともと曾祢莊の莊司には租税臨時雜役が課せられていたことになろう。そして、莊内の寄人らにも臨時雜役が負わされていたことを物語っている。

莊司と寄人らに課せられる臨時雜役は官省符莊園の是非とかかわっているものであるが、官省符莊園と臨時雜役についての詳細は坂本賞三氏の論稿^{〔6〕}があるので、坂本氏の論究を参照されたい（坂本氏の官省符莊園に関する論究に対する疑義は持ち合わせているが、直接へ莊司）に対する検討とかかわらないので、ここでは避けたい）。

ただ、曾祢莊の莊司や寄人らに対する臨時雜役の賦課の是非がいかかる要件によるものかが、天曆七（九五三）年八月五日付の「民部省符案」からその一端を窺うことができるであろう。すなわち、この省符案には

民部省符 伊勢国司

応・為・輪・租・税・田・醍・醐・寺・一・志・郡・曾・祢・莊・水・田・百・四・十・町・百・步・事

六条

右被太政官去二月二十七日符備、（中略）、件莊家水田朱雀院所領也、而依宣旨、以去天曆二年二月二十八日施入寺家、爰可免除莊田租税莊司寄人雜役之由、太政官以去年九月十五日下午符彼国、而国宰称不載坪付、不給省符之由、猶課雜役、望請、被給官符於民部省、令下省符、永免除租税雜役、（下略）

という記載^{〔7〕}があり（傍線―奥野、以下同様にて略す）、朱雀院領の水田一四〇町余を醍醐寺に施入した莊田に租税、莊官である莊司と莊内の寄人に臨時雜役が課せられないために不輪租税田となることを明示

しているが、曾祢莊々田は民部省の国図帳簿に莊田の坪付が記載されないために官省符莊園として承認されていないかつたことを示している。つまり、朱雀院領水田は醍醐寺に寄進されてから立荘したと想定し得る曾祢莊が不輪租田として承認されて官省符莊園に認知されるか、否かによつて、莊田租税と莊司・寄人臨時雜役の賦課が、免除すべきかが判断されるといえよう。

曾祢莊にかかわる官符案と省符案と同様な事象は、天禄三（九七二）年五月三日付の「天台座主良源遺告」に記載されている二つの莊園にみえる。すなわち、

岡・屋・莊・一・処^{〔田〕}地・百・六・十・余・丁^{〔出カ〕}

^{〔載在券文〕}

右・莊・本・故・九・条・殿・御・領、薨・給・之・後、依・御・遺・言・改・寄・法・華・堂・也、
田・地・本・数・百・二・十・余・町、進・納・地・子・年・料・二・三・十・石、為・院・領・以・来、
殊・加・檢・察、勘・立・田・地・百・六・十・余・町、申・下・官・符、免・租・税・官・物、募
免・莊・司・莊・子・五・十・人・雜・役・了、年・料・地・子・每・年・倍・増、去・年・納・百・六・十
余・石・也、是・老・僧・之・方・計・也、後・も・有・莊・勢・者、弥・開・禿・荒・地、隨・地
子・之・数・倍・増・也、（中略）

軀・結・莊・一・処^{〔所〕}領・田・地・六・十・余・町

此・莊・元・角・好・子・先・祖・領・也、故・判・事・大・属・武・連・口・入・施・入・相・副・本・公・驗、
永・施・入・了、（中略）、上・皇・御・宇・之・日、奏・聞・事・由、賜・官・省・符・於・国、
と・奉・行・下・符・在・郡、免・除・田・地・租・税・莊・司・莊・子・六・十・人・雜・役・了、件・莊
地・子・上・分、可・充・法・華・堂・四・季・懺・法・間・灯・明・料^{〔一〕}、^{〔夜別〕}其・遺・房・司・進・退、
（中略）、充・本・尊・常・灯・房・舍・修・理・料・了、

という記載^{〔8〕}がそれであり、旧九条殿領の岡屋莊と元角好子先祖領の軀

結荘とも租税官物または田地租税の免除と荘司・荘子（五十人あるいは六十人）の雑役の免除をおこなったことが窺える。そして、岡屋荘では官省符認定がなされたという記載はないが、荘司らの雑役免除を募った前提に「申下官符」の文言が示されていたのであろう。軀結荘では官省符を賜ることによって荘司らの臨時雑役免除となつたことが明示されている。

このように官省符荘に付与された臨時雑役免除は荘司と寄人あるいは荘子を対象にしたことになるが、長和二（一〇一三）年十月十五日付の「丹波国大山荘司解案」にみるような事態が生じることがあるといえよう。すなわち、

東寺伝法供家大山荘司解 申請 国裁事
請被任代・例免除供家所領荘田坪・状

在多紀郡西泉河内郷

（中 略 ※条里坪付の町反歩数を略す）

右件荘田者、承和十三年九月十日奉 勅施入、隨即依官省符旨、
国郡奉行、租税官物・荘司・雑役免已了、^{（除脱カ）}自爾以降二百余歳、于今
代・国宰依寺家御牒、任見作被免除已了、而国検田使背旧例、悉

以収公、付徴臨時雑役之間、収納使入部官物勘責、仍言上如件、
望請、国裁、（下略）

という記載^⑨によって、官省符荘の承認が与えられて租税官物と荘司雑役の免除となつて二〇〇余年を経過しているが、検田使は旧例（官省符荘認可・承認）に違背してことごとく収公し、臨時雑役の徴収をおこなつたことと、収納使は荘内に入部して官物を勘責したことが窺え

る。

この事象は私領の荘園が官省符荘園であるのか、否かという状況を表現するのではなく、官省符荘園の是非を越えて国衙公権の横暴な行使を示していると考えられる。

このことはともかく、一〇一〇年代以後には荘司に対する臨時雑役免除にかかわる史料はみられなくなり、荘司本来の職責に繋がる史料が目立つようになってくることは確かなことであろう。

ただ、これらの史料に現われる「寄人」「荘子」とともに「荘司」に何故に臨時雑役が課せられているのか、またその要件とは何であるのかは捉えきれない。

この事態と同様なことは「荘司」と「荘子」ではなくて、「荘預」「荘子」がともに臨時雑役免除の対象であり、さきに触れた東寺伝法供所領の別の史料にみられる。すなわち、時期が少し遡るが、延長二（九二四）年八月七日付の「東寺伝法供家牒案」には

東寺伝法供家牒 丹波国衛

欲被任先例、免除大山荘預并荘子等臨時雑役状

在多紀郡

荘別当僧平秀 専当乙訓益福 田刀僧平基 僧勢豊 僧平
増

牒、件荘故実恵少僧都、以去承和十二年九月十日、申下官省符、
為寺家田、充用伝法并写経料、（中略）、欲被任先例、免除荘預并
荘子等臨時雑役、事依功德、不随厭却、以牒、
という記載^⑩と、承平五（九三五）年十月二十五日付の「東寺伝法供家

牒」には

東寺伝法供家牒 丹波国衙

欲・被・任・先・例・免・除・大・山・荘・預・并・荘・子・等・臨・時・雑・役・状

（中 略）

牒、件荘田、依承和十二年九月十□官省符、為伝法料田、以其地

子米、充用伝法并書写一切経料、（中略）、欲・被・免・除・任・先・例、彼・荘・預・并・荘・子・等・臨・時・雑・役、（下略）

という記載があり、延長二年と承平五年とも東寺（伝法供家）領大山荘の荘預と荘子らの臨時雑役免除を欲求していることがわかりこの免除の前提には官省符荘園としての承認であったことが二史料から窺える。

このことよりも大山荘の場合には臨時雑役免除の対象が〈荘預〉と〈荘子〉であるのに対して、さきに触れた醍醐寺領曾祢荘では〈荘司〉と〈寄人〉であり、旧九条家領岡屋荘と旧好子先祖領輅結荘では〈荘司〉と〈荘子〉であるのは、いかなる要因によるものであるのか諸史料から判断しがたい。

さらに、〈荘預〉〈荘子〉と〈荘司〉〈荘子〉との文言によつて、荘司が荘預（後世の預所）は同一視できるという理解し得るかもしれないが、現時点では荘司と荘預が同一視できると断定し得る史料の根拠は見出しがたい。この荘司＝預（預所か）について後述したいので、ここでは検討することはひかえたい。

ところで、さきに触れたように何故に荘司が寄人あるいは荘子とともに臨時雑役が賦課される対象であるのかは掲げてきた史料から窺え

ない。

荘司にかかわる主な疑問は、社寺権門の私領である荘園の立荘後、荘園管理・運営に携わった荘官としての〈荘司〉が臨時雑役の賦課対象になっているのかである。荘民に官物・雑役を賦課沙汰して徴収する荘官身分の荘司に雑役が課せられるのであろうか。

この疑義は荘園公領制社会において〈荘園制〉を基盤にした認識に対して、〈公領制〉の立場から荘園をみると、荘内の荘民はもとより荘官である荘司は租税官物および雑役賦課の対象であり、公領（国領）で耕作に従事する百姓（戸主・戸と称されていたものかは判断しかねる）らに賦課する形態と同一視し得るのかもしれないが、直に解決できることのない課題であるといえよう。

ただ、ここで明示し得ることは、荘司らに（臨時）雑役賦課から雑役免除へと展開していき、その終焉の時期が一〇一〇年代であり、この時期以後には荘司らの雑役免除の要望とその承認に関する史料からみられなくなるようである。

この一〇一〇年代を境に、荘司は荘官としての職責を果たすべき勤仕が次第に史料に現われるようになる。荘司の職責については後述していくが、ここではその二例を次に掲げるとどめておきたい。

その一例は、長元元（一〇二八）年十月四日付の「丹波国大山荘司解」で、その解文には

東寺御領丹波国多紀郡大山御荘司解 申・注・進・御・荘・田・当・年・見・作・事

合九町六段

三大山里一坪七段 二坪三段二十歩

(中 略)

右御莊田、当年見作注進如件、以解

(年月日省略)

御莊司・信濃掾・山田久光

とあり、大山莊の莊司は莊田の当年(長元元年か)の現耕作(の状況)を注進していることが窺える。莊司の職責として莊田現作の実態を注進する務めがあることがわかる。

次の例は、長元八(一〇三五)年^(正カ)□月二十日付の「山田莊司等解」であり、この解文には

□^(山田カ)御莊司等解 申請政所 恩裁事

(中 略)

右謹案事情、件 御莊摂津播磨国之境、往反不善之輩、動成犯、或時放火時殺害、如此事連々不絶、請 政所被聞 御消息、給庁宣、早停止不善之輩、且捕進成犯之輩、仍勒事状、謹言、

という記載¹³があり、不善輩が山田莊内で放火や殺害するという犯罪行為をしれば繰り返しておこない、この行為は連綿と続いているので、犯罪輩である不善輩の行為を早く停止して捕縛される庁宣を給わりた¹⁴いと、山田莊の莊司が上告している。

この莊司の解文から、莊司の管理・運営には、莊内の莊田の現況把握と対処のみならず、莊民の日々の安泰への配慮が内在していたといえよう。つまり、莊民の安穩な生活に関与する勤めがあったと考えられる。

莊司の職責の一端を二例の史料から垣間見てきたが、次にもう少し詳しく莊司の莊内での職責を窺っていくことにしたい。

第二章 平安・鎌倉期の莊司の存在

官省符莊園の肯否にともなつて莊司らに臨時雜役が賦課されていたが、所領地所有者である寺院・神社の莊園を官省符莊園——もともと民部省などの基本図帳記載がなかったとしても——であることを強調して、莊司らの臨時雜役免除に導いていったことを窺ってきた。そして、雜役免除の莊司の職責について二例ほど垣間見てきたが、ここではもう少し莊司がおこなってきた職責について諸史料をもとに検討していくことにしたい。

すでに、莊司の職責で莊田現作の注進は前述したように莊園の管理・運営に従事する莊官としての任務である。

莊司が莊園管理・運営に従事することを端的に示す史料として、天喜四(一〇五六)年二月十二日付の「山城国玉井莊司僧源久解」があり、その解文には

玉井御莊司・僧源久解申請東大寺別当大僧都御室裁事

請被殊蒙 鴻恩 任先例、源久偏令執行御莊務状

右、請檢案内、權御莊本自田畠少、住人不幾、而本莊司長源号有

可執行之由御定、何不幾御莊、被令執行兩人莊司哉、望請蒙 鴻

恩、偏被執行源久者、将仰高恩之貴、仍注事状、以解

という記載¹⁵があり(傍点・傍線―奥野、以下同様にて略す)、長源に代わつて源久が莊司として莊務を執行していることが窺える。

この解文は玉井莊の莊司が莊務を執行することを表現しているが、莊務の詳しい職責は示されていない。

だが、保延六（一一四〇）年七月二十三日付の「山城国玉井荘司申文案」をみると

東大寺玉井御荘司安曇成任等解申請大政所裁事

請殊蒙鴻恩、且召誠頼友等身、且重被裁断当荘御荘押妨三個条愁状

一字并手谷河分水尚頼友等押妨事

右件水、去年度も御裁定之上、被上遣御使、任理令引漑了、然

石垣御荘司頼友・住人友久・吉貞等、俄募西金堂之威、相語惡

僧・珍勝・友久・父甥也・押止分水、（中略）、

一堺畠背御裁定、尚石垣御荘押妨事

（中略）

一山并路同背裁定、尚加制止事

右件山路、当荘住人切進御寺家・二季・比曾・瓦木、既及四百歳、敢

無他妨之間、去年始頼友等俄所押妨也、（中略）、件山路者、往

古当荘所進上來也、石垣住人者、自本此以南別山路用也、雖然

年来全不闕寺役、不怠御荘之勤之處、頼友等阿党当荘之間、寄

事於公事、所申出事也、（下略）

という記載¹⁵によつて、時期がずつと下がるが、山城国玉井荘々司の解文の申文から石垣荘々司らは、分水を押し止めること、玉井荘と石垣荘の堺にある畠地子を責め取ること、そして玉井荘住人が寺家・二季の比曾・瓦木を切り進む山路での石垣荘々司らによる採木するなどの押妨をおこなっていたことが窺える。

このように玉井荘の荘司は荘田への灌漑用水の分水のことや山路での採木のことも、莊園管理・運営の一環として従事していたことになり、さらには莊域境界での畠（田地にもある）地子への狼藉への対応もおこなわなければならないといったえよう。これらの莊園運営・管理にかかわる従事（勤仕）・対応は荘司の職責であつたといえよう。

また、荘司が従事すべき職責は、応徳二（一一〇八五）年五月十四日付の「東寺領伊勢川合大國莊司解」に示されている。すなわち、

東寺川合大國莊司解申請 祭主裁事

請被殊任 解状、停止延能權称宜無莊充文、他人耕作下種後、以四月二十八日及播殖期、号古作莊田、重押時、年来莊田四町七反、籠作不致弁、恣張行不善不安愁之状、

在東寺勅施入莊田多紀郡十五条三岡前里十三坪一町二十三一

一町

（中略）

右、件称宜籠作莊田、毎年官物致未進、（中略）、且出莊田請文可耕作之由、雖加催無承引、俄耕作違期之剋、下種之上、重押時種致妨、為停止言上如上件、望請恩裁、任本寺下文旨、被停止者、（中略）、令弁官物未進、兼任充文旨、令耕作番殖矣、以解、

という記載¹⁶がそれであり、川合大國莊々司が大神宮權神主荒木田延能の張行の不善に対して祭主の裁定を申請した解文である。延能の不善の張行とは、同荘々田の請文を提出して耕作すべきところ俄かに耕作時期でない時期に蒔種を押妨したことや古作と号した年来の莊田四町七反を籠作して官物未進する事態を表現したものといえよう。

川合大国莊の莊司の訴えによって、同莊における莊田の現況把握のみならず、莊田に対する押妨や籠作、さらに官物未進への対処という実務での職責のあることが窺える。

また、莊司に対する地子および所役を沙汰することが備前守平忠盛より下されている。長承二（一一三三）年九月七日付の「備前守平忠盛下文」がそれで、

下・頼田御莊司、

可令早任度、下知旨、沙汰東大寺領頼田莊家訴申寺領地子并所役事。

右、件所役、任先例可勤仕之由、度、雖令下知、弥以所涉為宗之由、有其訴、（中略）、对捍之条、甚以不穩便事也者、且任先例令勤仕寺役、且可停止狼藉之状、所仰如件、（下略）

という記載があり、備前守より東大寺領頼田莊の地子や所役の対捍の訴えが莊家からあることと、この寺役に対する狼藉を停止すべきことを莊司が沙汰することを下知している。

頼田莊の莊司は寺領に課せられた地子や所役である寺役の勤仕を沙汰する職責をもち、莊域の賦課役が対捍・狼藉なく遂行されていることを承知しておかなければならない立場にあったといえよう。莊司が遂行していなければ上層より下知が下されることを、この下文から捉えることができる。

だが、上層からの下知によって莊司は行動するのみではなく、莊司自ら狼藉に対処すべき陳状を申進することが、応保二（一一六二）年十一月十八日付の「摂津国棕橋西莊司等陳状案」から窺える。すなわ

ち、

棕橋西御莊司等解 申進 陳状事

弁申東大寺領為猪名下司頼兼、恣以新儀無往古限堤作出絵図、橘御園役田并棕橋御莊役押入、一蘭莊可立由訴申、無道子細状という記載がそれであり、下司頼兼の謀計——蘭莊を立莊し、傍示を打つという行為——に対する陳状である。この棕橋西莊の莊司ら解による陳状申進には、専當・案主・田所・下司（僧）らの連署名がみえる。

ここにも莊司は莊園の現況把握によって異なつた事態の発生に対処する莊司の職責が示されているよう。

この陳状案の事態と同様な事象は、仁平二（一一五二）年五月十六日付の「前関白藤原忠実家政所下文案」にみえ、この下文案には

下 大和国平田莊司御等

可早任法家勘状、停止基通入道并姉子僧嚴実等妨、令政頼領掌故実智法師所領田畠事

（中 略）

右件田畠、先日依有基通入道申旨、暫可令領作之由、所被下知也、（中略）、任本文書并法家勘状、停止基通入道以下姉子・嚴実等非論、令政頼領掌、任先例可勤仕御莊役之状、所仰如件、故下、という記載があり、宇治禪定殿下が平田莊の莊司に下した事柄は基通入道以下橘姉子と僧嚴実らによる押妨を停止し、政頼に故実智法師所領田畠を領掌せしめて、先例に任せて莊役を勤仕すべきことである。

この下文でも、莊司には所領田畠の押妨を停止させるとともに政頼

が領掌した所領への荘役勤仕をさせる職責があることを示している。

荘司の職責は荘域の田畠への賦課役の沙汰・執行とは異なる国使濫行の停止も含まれ、荘司らの解文がみられる。すなわち、保元二（一一五七）年二月日付の「伊賀国玉瀧荘司等解案」には

玉瀧御荘司等解 申請 御寺政所裁事

請被特任道理言上 殿下、停止国使濫行。安堵莊民子細愁状、被定田数所当

右、謹検案内、当莊者、往古官省符一箇御領也、（中略）、当司夫久安之比利宗俄

有莊田百余町、被収公頼田村之廻、御封百四十余石偏被切懸。了、當村

是以外非道也、両郷作田僅三十余町、所便補租米段別一斗三升也、

（中略）、於租米者、便補寺家御封、其外悉以被免除之例也、即

黒田・薦生莊田同雖為治田、被免所当之後、未有国衙沙汰、於当

莊、何可背先例哉、（中略）、便補御封之外、百余石未進之由沙汰

出来、無左右乱入国使、依致責勘、為遁当難、莊民等逃去了、

（下略）

という記載があり、長文に亘ったが、国使が濫行した経緯が明示されている。荘司らは、この玉瀧荘は従来から官省符莊園でありながら、俄に莊田百余町があると号されて頼田村を収公して御封百四十余石を切懸けられたこと、黒田・薦生莊田は治田であるが、所当免除された後も国衙の沙汰もなく、便補御封の外に百余石の未進であるという沙汰が出されて国使が乱入し、（莊民を）責勘いたすことによつてこの難を遁れるために莊民らは逃去った事態に対する停止の裁定を請けたという解文である。荘司らによつて国衙の在地官人である国使の有無をいわず乱入して莊民らを責勘した濫行を明らかにされた。ここ

では、荘司による国衙公権の濫行に対する職責を窺うことができるようである。

荘司が従事すべき莊園管理・運営にともなう職責には、当然ながら、莊域において莊田を耕作して莊役を徴納する莊民に日常的安堵をあたえることが含まれているといえよう。

このように莊園管・運営において、荘司の職責には、莊園所領の動向にも目配りする必要があった。

このことはともかく、荘司が所領処分にもかかわっていることは、次に掲げる二つの史料から窺える。その一つの史料は、天永三（一一一二）年十二月三日付の「某処分状」であり、「故津島守処分之旨」の「大和所領田畠事」「十四町六段半」に対して「件字万歳殿所領田

畠等、任処分帳之旨、所報等立券進如件、仍在地平田御莊司等可署判之」という文言がある。処分対象の大和所領田畠は平田莊の荘司が加判署名していることから、恐らく平田莊域の所領田畠であろう。

もう一つの史料は、治承□（一一八〇）年五月十三日付の「僧相兼田畠処分状」であり、この処分状には

処分 田畠事

合水田二段者在水間郷内 字牛打

畠二段者在岡郷 字房垣内

右件田畠者、僧相兼之私領也、年来領知間、更無相違、而依為縁友之夫妻、名積仲子、限永代奉処分畢、更不可有他妨、（中略）

僧相兼院（花押）

（中略）

莊・司・助・正（略押）

（下 略）

という記載が²³それであり、莊・司・助・正が三人の僧侶とともに連署加判している。ただ、助・正・莊・司がどの莊園の莊・司かは明らかでないが、水間郷内（恐らく水間莊）の田畠であることは史料から読み取れる。

このように一・二世紀中頃から一・二世紀後半にいたる間に莊・司は、①莊園全体に亘る莊務、②分水・莊域界畠地・山路採木押妨停止の行使、③莊田籠作・未進官物弁進執行、④莊家役対捍停止の行使、⑤国使乱入・莊田収公・莊民責勘停止、⑥田畠処分状署名などの莊園管理・運営に直接関与していることが窺える。また、前述した現作注進や不善輩の行為停止なども加えられ、莊田の現況把握と放火・殺害の（不善輩捕縛）裁定謹言も莊・司の職責になっていたと考えられる。

では、一・二世紀後半以後、つまり鎌倉期以降の莊・司の職責は、鎌倉期以前と異なることなく遂行されていたのであろうか。

そこで、鎌倉期の莊・司の職責に視点を当てながら、莊・司の存在形態について検討していくことにしよう。

まず、鎌倉期の莊・司の職責は、平安期以来継承されているかを諸史料から検討していくことにしたい。最初は建仁元（一二〇一）年銘と認識されている「某書状」をみると

力藏・觀音丸ハ、随□其所当弁済候了、是偏理至極故□、
残百姓不随催候、自故此秋之時、任□□可有沙汰候由、
莊・司等申上候者也、

觀明房已講猶被申候田畠栗林等、委承候了、抑先日令注進田畠□^{（栗カ）}

林等者、自往古国領候、又為莊之時、□新御莊領候也、（中略）、
只任国例、可令勤□□物・雜事之由、莊・司等頻所訴申候、又実
嚴威儀師新莊檢注之時名寄、此田員不書載之由、令申候者候、以
外事候、早召上彼名寄帳、可被披見□

という記載²³があり、所当弁済をおこなった力藏・觀音丸に反して、残りの百姓らは所当返済に従うことがなかったので沙汰あるべき事態を莊・司らが申上したとあるが、田畠栗林は往古国領出、莊園となった時点で莊領であるという。そこに官物雜事の勤仕が国例としてあったゆえに莊・司は百姓らにこの所当弁済をすべきと申上したことになる。

この莊・司の職責は、直接百姓らに沙汰することにあつたと考えられる。なぜなら、虫損で明確にしがたいが、「可令勤□□□物・雜事之由莊・司等頻所訴申候」という文言が示唆しているといえよう。

次に承久三（一二二一）年銘のある「豊前下毛莊檢田目錄案」をみるかぎり

□莊・司・解

□注進 承久三年檢田目錄事

合見作三百六十四町三段二十代

除不輪祖田^{（マ）百八}九十二丁三十

仏神事田七十六丁三十

金堂免二十二丁七反二十^丁

永久十^{六（一カ）}□丁□反三十

本稻重五丁一反

猪山社上分社^田三丁 已成校名

大貞社免十丁三段 已池永名

大根河社免十町内

稻富二丁 稻男一丁 稻豊利一丁

（下 略）

という現作田の検田目録が下毛荘の荘司によって注進されていることが窺える。²⁴

荘司による荘田現作の検田注進は、すでに平安期、つまり長和（一〇一三）年の丹波国大山荘の荘司解文²⁵でも提示したように、この案文は鎌倉期に至っても荘司の職責として継承されていることを表現しているといえよう。

また、神役沙汰すべき荘司の職責もみられる。時期はずっと下るが、弘長二（一二六二）年十二月二日付の「某下文」には

下 伊勢国木本御厨[・]荘司[・]職事

後山三郎盛忠

右、為[・]彼[・]職[・]、任[・]先[・]例[・]為[・]神[・]役[・]、前[・]地[・]頭[・]得[・]分[・]無[・]懈[・]怠[・]、可[・]致[・]其[・]沙[・]汰[・]也[・]、

但於有懈怠者、他人可被仰付之状如件、

という記載があり、木本御厨の荘司には「職」（補任）付帯によって、神役である前地頭得分を懈怠せずに沙汰いたすべきという職責があったことを明示している。併せて、この職責が果たし得なかったときには、荘司職は他人に仰せ付けるという事態も付加されている。

荘司職はこの下文の時期（一三世紀中頃）以前からみられ、以後にも「職」付帯の荘司は存在する。その一例として建長二（一二五〇）

年六月三日付の「信全所領注進状案」から窺うと

注進 先祖相伝所帶屋敷名田等事

（中 略）

一 佐嘉御荘

荘司政所職、清禪寺別当

（中 略）

一 比水田御荘内

荘司職、北嶋屋敷并在家田畠等

という記載があり、この案文の末文にし「修理少別当信全上」という署名がある。修理少別当の信全は荘司政所職と荘司職を付帯していたことになるが、荘司政所職とはどのような「職」であるのかは明らかではない。

このことはともかく、弘安二（一二七九）年四月 日付の「伴頼広陳状案」には「時貞為御荘司、欲弁進八丈絹百疋・千両於大衆御中云々」「為荘司可令致件勤云々」という文言があり、時貞は荘司として弁進を欲し、勤仕致すべき云々という状況が明示されている。この八丈絹百疋・千両は年貢であり、一一七町余の地利であることが示されている。この年貢は荘司自身が弁進すべきもので、絹百疋・千両とは、案文の「往年之昔、莊家豊饒之時、猶以雖為当莊過分年貢、以時貞忠勤之儀、請申百疋・千両之時、寺家至要之由」という文言によつて、時貞荘司が請申したものであったと考えられる。

このように荘司の意図によるものか、否かは明確ではないが、荘司にたいする年貢があることを表示する史料があり、次に掲げておくこ

とにしよう。それは、文保二（一一三八）年十月四日付の「西田井日記」と表現されている「丹波大山荘西田井年貢注進状」には

西田井二段七百五十文 平内（略押）

（中 略）

一段三百十六文 藤太夫（略押）

二段七百五十文 与一・莊司（略押）

西田井、田ノ作^人分、一井谷百姓等、文保元年御年貢預所殿へ運上

注文、

という記載³⁰があり、与一・莊司らの年貢を預所殿への運上注文が窺える。

この注進状に明示されている与一・莊司は、同年十月十九日付の「丹

波大山荘百姓申状案」の文末には

百姓等淨妙法師

平・莊司

藤判官代

本・莊司

二・郎・莊司

与一・莊司

という連署名の中にみられるが、与一・莊司以外の平・莊司・本・莊司・二・郎・莊司らも抹消されている。

だが、この申状案で抹消されていたとしても、大山荘には与一・莊司を含めて四名の莊司が存在していたことを示唆しているといえよう。

さきの時貞・莊司や与一・莊司らが年貢を弁進したことは抽出し得るが、

莊司としての職責については明確に諸史料（陳状案、注進状、申状案）からは提示することが出来なかった。

ところで、平安期の莊司が所領寄進にともなって署名している事象と同様に、鎌倉期においても莊司の職責として署名していることが、時期はずつと下る嘉暦元（一二二六）年九月十六日付の「摂津長州厨領家寄進状」から窺える。すなわち、

寄進

摂津国長州御^厨

・灯・爐・堂・同・敷・地・温・室・等・間・事

右、於灯・爐・堂并温室者、本願値願上人申請本社建立之地也、（中略）、仍更立四至、打傍示、定堺訖、凡彼両寺四至内者、自元令

免除万雑公事畢、雖向後、且守此寄進状旨、（中 略）、

〔年月日略〕

小使（花押）

・莊・司（花押）

・公・文（花押）

惣追捕使（花押）

執行

御代官（花押）

という記載³²があり、長州御厨内の灯・爐・堂と同敷地および温室の寄進状に莊司が公文・惣追捕使・代官らとともに署名押判していることがわかる。

このように鎌倉期の莊司の職責は、平安期の莊司の職責を継承してきたことが窺える。つまり、掲げてきた諸史料によるかぎり、①莊司

は百姓らに所当官物・雑事の弁済を沙汰、②荘司は現作田検田（目録）を注進、③荘司職付帯による前地頭得分の沙汰、④荘司・百姓らの年貢注進と（預所職への）運上、⑤荘司・公文らによる所領寄進への署名押判、という荘司の職責があり、荘司の年貢注進もみられる。

平安期の荘司が従事してきた荘務の分水・畠地などでの押妨停止の執行や国使莊田収公・荘民勘責停止の行使にかかわる荘司の職責は、鎌倉期には存在しなかったことになる。ただ、分水などの押妨と国使収公への停止執行は鎌倉期の各地域・莊園の状況によって頻繁に起こり得るものではないと考えられる。

だが、荘司は未進の官物弁進遂行、所役対捍の停止行使、所領寄進（処分でないが）にともなう署名・押判などをおこなっている。これらの事象は鎌倉期の荘司は前代の職責を踏襲してきたことを表現しているといえることが出来るであろう。

しかし、莊園全般に亘る荘務執行は〈荘務〉にかかわる諸史料から抽出し得なかった。この〈荘務〉については次第に力を発揮するようになる雑掌の職責とも関係してくるので、ここで特段検討することはひかえたい（雑掌とかかわり深いのは〈荘務〉よりも〈所務〉である）。ただ、荘司が検断とかかわる史料の抽出はほとんど出来ないが、荘務あるいは所務の範疇は検断があることと関係するものか、否かという問題点が内在するのではないかと考えている。このような問題点とともに重要なことは、荘司が預所あるいは下司であるのか、否かであろう。

最初に示した二つの辞典に明示されているように荘司が預所である

のか、または下司であるのかという課題は、平安時代中頃以降の莊園公領制下の莊園機構に深く関連してくると思われる。

それゆえに、次に荘司は預所であるのか、下司であるのか、それとも荘司のままの存在であるものかを、荘司にかかわる諸史料を再び繙きながら検討していくことにしたい。

第三章 莊園管理・運営の荘官―預所と下司と荘司―

平安期から鎌倉期に至る時期に荘司が従事してきた職責は、当然ながら莊園管理・運営であり、とりわけ賦課役弁済にかかわる沙汰執行と荘内公田対象の課税の所当官物・雑事弁済への申上・執行であったといえよう。そして、賦課役の対象となった莊田（畠）の検田注進が荘司によっておこなわれていた。さらに、直接莊園管理・運営と関係しないが、所領寄進・処分にも荘司は関与していたことが指摘し得る。ところで、平安時代中頃以後の荘司の職責は脈々と継承されてきたが、荘司は莊園公領制における莊園管理・運営に携わる上級荘官身分であると認識されている預所（荘預）や下司であると考えらるべきであろうか。つまり、荘司が預所または下司であるゆえに、一荘官として莊園管理・運営に従事し得たのであろうか。

この疑義は、はじめに掲げた辞典に明示しているような〈荘司〉は莊園管理・運営する〈在京預所〉であり、莊園運営・管理者の〈筆頭下司〉であるとする提示に対してであるが、荘司が下司・田所・家主・専当などの〈莊園運営・管理者の総称〉であると言及しているこ

とも疑問視せざるを得ない。そこで、平安・鎌倉期の荘司にかかわる諸史料を繙きながら、これらの疑問点を検討していくことにしたい。

まず、天喜四（一〇五六）年八月二十五日付の「山城国玉井荘田堵等解」をみると、荘田に引く分水（灌漑用水）にかかわる田堵の愁い申す解文には

右、田堵等、謹案 旧例、雖年来之間、早拔候、分水罷下日半分者作得候者也、而今年者井手寺井并藤大納言殿御領等兩井被^(塞カ)□、分水不罷下、（中略）、仍皆悉早損畢者、早被下視之御使、（中略）、仍注子細、言上如件、以解、

〔年月日略〕

御・莊・預・頼・久

坂上記延

（中略）

御・莊・司・僧・（花押）

という記載⁽³³⁾があり（傍点―奥野、以下同様にて略す）、井手・寺井・大納言家領に来る井堰が塞がれて分水が罷り下らず、ことごとく早損してしまったので御使の下行を望むという田堵らの言上に荘預とともに荘司らが連署している。御使のことは明らかではないが、玉井荘の田堵らが蒙った事態の解文に対して、〈荘預〉と〈荘司〉の署名・押判があり、荘預（預所）と荘司とは別人であることは明白であろう。

また、承保三（一〇七六）年十一月二十三日付の「東寺領伊勢国大國荘司解案」には

東・寺・御・莊・司・解・申請・本・寺・政・所・裁・事

請・被・殊・任・解・狀、（中略）、糺・返・寺・領・田・地、桓・武・天・皇・御・勅・入・本・領

（施脱カ）

川合田六十六町之内十五町、号成願寺領妨坪・田等、（中略）、以去永承年中蜜^(密)以夜中打傍示、募神威掠領寺田地、為任莊田三反押取、（中略）、範任朝臣諸人等妨領不安愁狀、

右、下司謹檢、旧記、当莊以去延暦二十二年正月七日、奉勅施入田六十六町、川合兼又弘仁三年十一月二十七日百八十五町九段百八十步^(大國)莊田、布勢内親王墾田寺家勅入歳久矣、而御莊公驗罷入莊田等、代代別当注下給、未絶妨輩、（中略）、被停止旁爭者、将仰勅施入無止事矣、以解、

〔年月日略〕

莊專当大中臣安元

預 同 安延

下司 寂安

という記載⁽³⁴⁾によって、〈預〉と〈下司〉は荘司解案に連署していることがわかる。

そして、時期がずつと下るが、荘司解文以外の永暦元（一一六〇）年十二月 日付の「伊予国弓削莊田畠檢注帳」には

弓削御莊 注進永暦元年檢田畠目錄事

合三十二町三段八十八歩之内

田十二町七段三百十歩之内

（中 略）

得田九丁七十卜之内

神祭料二段

井料二段

（中 略）

預・所・給・一・町

御・莊・司・給・一・町

公文給五段

定使給五段

（中 略）

畠十九町五段百三十八歩之内

（中 略）

得島十一丁八反二百七十六ト之内

預・所・給・一・丁 御・荘・司・給・一・丁 公文給五段 定使給五

反・荘・檢・校・一・反 職・事・二・反 （給脱） （下略）

という記載³⁵があり、預所と荘司に各給田一丁を与えていることが窺える。預所と荘司以外の給田は公文と定使に五反が与えられ、預所と荘司の半分となっている。そして、この検注帳の末尾には、「右先例、検田畠数、目録注進如件」という文言と、「公文中原（花押）」「御荘司内舍人藤原（花押）」と連署・押判されている。

さらに、さきに掲げた辞典の「荘官」の項で言及しているように、預所を統括的管理者としての上司（上層）と位置づけて、管理実務に従事する下級役人・荘官沙汰人の範疇に「荘司」が含まれるのか、それとも預所や雑掌と同じ上司に入るのかは判然としないが、この検田帳をみる限り、預所と荘司の給田は同等であり、荘司も預所と同様に上司と位置づけし得るのではあるまいか。

このことはともかく、給田に預所と荘司が存在することで、預所と荘司は同一人でなく、荘司を預所と言換えたものでないといえる。

また、さきに触れた建長二年の信全の注進上案に記載してある「荘司政所職」「荘司職」とともに、「中法華堂預一口綾野御荘」という文言³⁶があるが、この「預一口」は預所あるいは預（いづれも「職」付帯を含む）であることが、弘安五（一二八二）年四月十七日付の「信全所職讓案」の「中法華堂預職在給米、綾野荘」という文言³⁷によってわかり、〈荘司職〉と〈預職（＝預所職）〉とは別々の存在であることが判

明する。

しかし、この例示は、さきに触れた辞典が提示するように「在京預所」が「荘司」であることに対応し得る史料の提示とはならないかもしれない。だが、この例示を除いたとしても、すでに掲げた三史料は、明らかに「預所（荘預・預）」と「荘司」が同一人または同一身分でないことを示しているといえる。三史料に加えて、もう一史料から預所と荘司が別々の存在であることを指摘したい。それは、寛元二（一二四四）年十月十三日付の「小槻淳方下文」の

下 列見定考便補近江国細江荘司住人等

定・補・預・所・職・事

右人、為令執行莊務、所定如件、荘・司・住・人・等・宜・承・知、（下略）という記載³⁸であり、莊務執行のための預所職補任に細江荘の荘司や住人らは承知しておくことと明示されている。かつて、荘司の職域であった莊務執行は、預所職付帯者に掌握されていることがわかる。

このように預所（荘預・預）が決して荘司であるという認識は諸史料によって肯定されないと考えている。

では、次に下司が荘司と同一人であるという理解は諸史料からどのように判断し得るものかを検討していくことにしたい。

まず、治暦四（一〇六八）年二月二十八日付の「伊勢国大国荘司解案」をみると

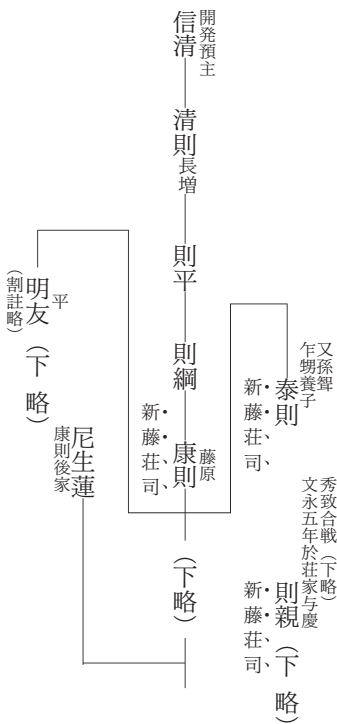
東寺領大国御荘司解 申請本寺裁事

請被殊任 解状、令聞案内祭主殿、申給請神官使、停止諸寺人
人或荘田請作、動成治田畠、被相論不安愁状、

という記載と文末の「莊下司寂安」という署名から、大国莊には莊司と下司が存在していたことが窺える。また、大国莊の莊司は諸寺院の甲乙人らが莊田を請作して、しばしばこの請作田畠を治田畠にした（称した）ことを停止し、本寺の東寺の裁定を申請したことがわかる。

この大国莊の莊司と下司については、すでに前述で掲げた承保三年の大国莊司下案にみえる「東寺御莊司解 申請本寺政所裁事」「右下司謹檢 旧記」と文末の「預 同 安延」「下司 寂安」の署名によって、莊司・預・下司が莊官として存在していたことを明示している。

また、時期がかなり下るが、永仁六（一二九八）年の史料と認識されている「美濃大井莊下司職相伝系図」には
という系図が記載され、それぞれの名前の横に割注が明示されている。
すなわち、割愛した則親の下には「則成」「則宗」「則広」の名前が連



なり、とくに「則宗」の左右の割注には、「親藤三郎」「童名観音丸」（左）と「依父祖之科、雖被預小野寺、蒙免除畢」（右）という文言がある。さらに、明友の下には、「教円」^{嫡子}「実円」^{養子}「性円」^{買得主}（いずれも左側の割注は略す）などの名前が連なっている（「康則」および「尼生連」以後の名前、割注は割愛する）。

この下司職の系図をみるかぎり、康則・泰則・則親の三人は「親藤莊司」と表示されていたが、則成・則宗・則広の三人は「新藤三郎」と明示されて「莊司」の文言はない。そして、「開発領主大中臣」の信清から五代目の康信が「新藤莊司」と俗称され、泰則と則親が新藤莊司を継承するが、相伝系図には下司職と標記されている。この系図によるかぎり、康則以下三人の新藤莊司が下司職を付帯していたとも解釈でき、莊司と下司（「職」付帯）は同一人であったと考えられない。

しかし、則成以下の新藤三郎を名乗るものが下司職を付帯していたという解釈も成り立つであろう。この想定のは非を確かめられる史料が四例ほどあり、次に順次掲げていくことにしよう。

まず、はじめに正応元（一二九三）年七月十七日と認められている

「東大寺政所」をみると

（美濃）
□□国大井御莊下司職事

大中臣観音丸

□□者、観音丸先祖相伝所帯也、（中略）、観音帯重代相伝文之上、祖父則親□□御命令追放寺家怨敵之間、（中略）、□□乃本所無不忠者、不可有相違之处、申略、頗非沙汰□□

観音丸為彼職、於名田畠者、任〔 〕知之、有限御年貢已

下恒例〔 〕^{（無懈カ）}怠可弁勤之状、所仰如件、（下略）

という記載があり、大中臣観音丸の童名を持つ則宗は下司職を付帯していたことが窺える。しかし、永仁六（一二九八）年二月 日付の「東大寺衆徒等申状案」には

東大寺衆徒等言上

欲早被弃捐則宗濫訴、当寺領美濃国大井・莊・下司・職・事

右、当莊者、一円不輸之寺領、更以非武家御成敗之地、下司・職・又・則宗・非・相・承・之・仁、（中略）、即則宗之祖父則親、去文永年中、於當莊依負物事、与林法橋慶秀致私合戦之間、両方被下関東、共以被流罪了、（中略）、則親之下司・職・慶秀之名田畠、本所収公之、于今無赫免者也、自余以来、於則親・慶秀者、永削名字、不可補當職之由、満寺群議事切了、（下略）

という記載があり、則宗は下司職を相承する仁でないこと、則宗祖父の則親は文永年中（一二六四～一二七四年）に慶秀と係争してともに流罪となり、則親の下司職は収公されたことが明示されている。これらの事態から、則親は文永年間に下司職を剝奪され、則親の孫の則宗は下司職相承の人格でなかったことが表現されている。

つまり、下司職の相承系図の割註も含めて、「下司職」の表示が則親・則宗・則広らにないことも納得し得るとともに、開発領主である信清から五代さきの康則・泰則・則親は莊司として荘園管理・運営に従事していたと理解すべきかもしれない。そして、下司職付帯については、永仁六年三月〔 〕付の「東大寺衆徒等訴状案」にみえる「文永

以後・淨・覚・広川左衛門入道・実・円・那・入道・性・円・尾藤太郎入道・重・範・侍従房・^{隆実}
○此等補下司職了^{（本房）}」という文言によつて文永年中以後に養子の実円と買得主の性円が下司職を付帯したことになる。

それゆえ、下司職相伝の系譜に明示されている〈莊司〉であつた康則・泰則・則親らが〈下司職〉を付帯していたとは考えられない。むしろ、莊司であつた則親の世代以後に下司職を付帯するが、孫の則宗は下司職相承を否定されると理解できよう。併せて、莊司と下司職付帯が同一視できるという理解が可能かを、下司職相伝系図および関連史料は示しているとは言い難い。

長文に亘つたが、下司職相伝系図に表現されている〈莊司〉と〈下司職〉とが同一のものではなく、別々に存在する莊官であることを導き出す手段として、系図に表示されている人たちと関連する諸史料を抽出して検討を加えてきたつもりである。

したがって、すでに掲げた辞典^{（47）}に明示されているように莊司と預所あるいは下司が同一視できるという認識は肯定し得ない。そして、同一視出来ないことは諸史料によつても理解し得る。さらに、すでに触れた網野善彦氏が美濃国茜部莊下司が係争地の実検立会をおこなつた莊司であるとする推論^{（48）}に対しても否定的に考えざるを得ないといえよう。それゆえ、平安期から鎌倉期にいたる時期には、莊司Ⅱ預所や莊司Ⅱ下司などは存在しなかつたと考えている。

ただ、莊司Ⅱ預所や莊司Ⅱ下司という存在はなく、莊司Ⅱ預所、莊司Ⅱ下司という存在形態は考えられなくはないであろうが、このような存在形態を明示する史料を抽出することが出来なかつたことは確か

であるといえる。

結びにかえて

一〇世紀中頃に荘司は現われはじめ、一四世紀に至るまで存続してきたことを諸史料の検討によって窺ってきた。また、荘司は時期を経るにしたがつて、預所あるいは下司と同一であるという理解が荘司にかかわる史料によって示されてきたと解釈したい。

しかし、荘司が預所である史料事例はもとより、荘司が下司である史料事例は抽出できなかったといえる。

むしろ、荘司は預所でも、下司でもないという史料事例が検出し得たことは、荘司と預所とが同一視でき、また荘司と下司とが同一視できるといふ認識への是非の「是非」を導くことになったといえよう。

言い換えると、一〇世紀に現われて一四世紀に至るまで存在続けた荘司は預所または下司に呼び代え（言い代え）られことはあり得ない。つまり、荘司は「荘司」であり、荘司が預所あるいは下司に名称・呼称を転化させることはないと考えている。

ただ、荘司が預所または下司に転化することは充分想定し得るであろう。荘司補任の身分段階から預所や下司補任の身分段階へと転化することは充分あり得よう。

このような事象は、すでに掲げた永仁六年の大井荘下司職相伝系図に明示されている「荘司」身分から下司「職」付帯「身分へ補任される事によって転化したと解釈出来る」とともに、言うまでもなく「荘

司」よりも「下司」身分の方が在地での権限行使の権力は強いものであると考えられる。

この事象と同様なことは太良荘定宴について一例を挙げると、雑掌から預所へ転化した状態であろう。次に定宴が雑掌身分から預所身分へ至った事象を若干みることにしよう。

まず、定宴が太良荘雑掌として荘園管理・運営に従事していた史料を一例掲げることにはしたい。それは若狭国で在地勢力を保っていた地頭若狭忠清との係争で雑掌定宴が対決した事態を示す宝治元（一二四七）年十一月五日付の「関東下知状案」である。そこには、

若狭国太良荘雑掌僧定宴与地頭若狭四郎忠清代定西法師相論
条々

一 勸農事

（中略）

一 検断事

（中略）

一 令點取御年貢六石由

（下略 ※他に「不出旧帳事」「以公文給引募地頭否事」あり）

という記載があり、勸農を含めて五ヶ条のことで東寺僧定宴は若狭忠清の代理である西定法師と争論していることが窺える。

この案文の時期から二五年後の文永九（一二七二）年十二月二十六日付の「定宴書状」にも、「仍百姓等安堵仕て、御年貢備進候、是定宴か奉公候、其後当荘被付寺家へ候時、僧正御房御文ニ、雑掌ハ如此不可有相違之由、被仰供僧中候」とあり、間違ひなく東寺の僧正御房

より雑掌として定宴が任じられ、供僧中にも仰せられていたことが理解できる。

そして、この書状から四年後の建治二（一二七六）年六月十日付の「若狭太良荘預所定宴下知状案」によるかぎり、定宴は太良荘預所として存在していることが窺える。すなわち、

太良荘沙汰間事、阿性房如元為代官、可随莊務之由、去春東寺御教書并定宴施行下遣之上者、不可有子細之处、（中略）、早任寺家御教書、如元阿性房令莊務、有限御年貢以下御公事、公文百姓等、一切不可成不審、仍重下知如件、

〔年月日略〕

預所在判

という記載がそれであり、預所定宴は阿性房に以前同様に代官として年貢以下の公事を沙汰すべきことと、このことに対して公文・百姓らには不審を抱くべきでないことを下知していることがわかる。

このように定宴が雑掌から預所に転化する次第を同一視して雑掌＝預所と理解すべきでないことはいうまでもないであろう（雑掌＝預所についての論及は皆無ではない。このことを含めて雑掌について別稿で同一視できないことも言及している）。

したがって、荘司、預所および下司と同一視し得る存在でないことは確かなことであると考えている。

〔注〕

（1）～（3） 網野善彦『日本中世土地制度史の研究』

網野氏は、同著書で『平治物語』にみえる平致経の子孫長田忠致が

野間内海荘の荘司となつてゐることも言及している。この荘司忠致以外にも荘司について明示しているが、ここでは割愛することにした。戸田芳実『日本領主制成立史の研究』戸田氏も本文に掲げた荘司のほかに、網野氏同様に愛智荘々司を挙げている。

（5）『平安遺文』第一巻、第二六二号文書（以下同様にて、平安遺文一一二六二というように略す）

（6）坂本賞三「免除領田制」（『王朝国家体制論』所収）同論稿で論述している「田地が免除されたりしたのは、けつして四至内にあったからというような単純な理由に基づくのではなかった」という論旨には納得しがたいが、ここでは直接関係する論点でないので、いずれこの論旨については検討していきたいと考えている。

（7）平安遺文一一二六六

この史料にみえる「寄人」が「田堵」としての存在であることは別稿で論究しているので、その要点は割愛したい（別稿を参照されたい。文末に稿名を明示する）。

この曾祢荘ではないが、長久三（一一〇四二）年十二月二十五日付の「官宣旨案」にみえる東寺領大山荘において「四至之内、国使不可入勘之由、被下給宣旨、爰国守藤原保家朝臣、乍見宣旨文、更入乱数多国使、捕擄莊司田堵等責凌」（平安遺文二一六〇一～一六〇二）云々という状況があり、「莊司」と「田堵」が国使らによつて捕らえられている。この大山荘での事象はともかく、本文で掲げた延長二年の東寺伝法供家牒案の「大山荘預并莊子等」と「莊別当僧平秀」とともに「田刀僧平 僧勢豊平増」と表示されている「田堵」と「莊子」とが同一であるかも検討課題としてあるかもしれない（平安遺文一一二一九）。

つまり、「寄人」＝「田堵」＝「莊子」という状況が考えられるならば、大山荘の「莊子」と称される身分の者が特定しえるであろう。このような視点で検討する必要があると考えている。

奥野義雄「田堵をめぐる存在形態について——田堵の成立・展開とそ

の実態によせて―」（『鷹陵史学』第二九号〈佛教大学歴史学部刊〉所収）

- (8) 平安遺文二―三〇五
(9) 平安遺文二―四七二

この史料にみるように国検田使（または国使）が荘田―図田帳簿に従前に記載されずに官省符として承認されていない田地―を収公して臨時雑役を徴収するという事態はこれ以外にもみられる。次にその一例を掲げておくことにしたい。すなわち、治安元（一〇二一）年十一月二日付の「東寺伝法供家牒」の

奉 勅施入、随則依官省符旨、国郡奉行、免除官物租税臨時雑役等已了、（中略）、早任旧例、被免除件荘田収公、（下略）
という記載がそれである（平安遺文二―四八五）。

- (10) 平安遺文一―二一九
(11) 平安遺文一―二四五
(12) 平安遺文二―五二三
(13) 平安遺文二―五二七
(14) 『平安遺文』第三卷、第七六〇号文書（以下同様にて、平安遺文三―七六〇というように略す）
(15) 平安遺文五―二四三二
(16) 平安遺文四―一二三七

この史料にみえる大国荘および称宜である権神主荒木田延能に関する史料があり、次に三例ほどを掲げておきたい。

応徳二（一〇八五）年六月六日付（日記）の「東寺領伊勢国大国荘政所日記」には、「為令播殖、田汁を位置之間、稻木大夫延能神主従類三十余人俄到来、件田五反非道押殖」とおり、延能の非道が明示されている（平安遺文四―一二三八）。

また、応徳二年六月九日付の「太神宮検非違使新家俊晴」には、「以今年十四日御荘司僧円順進於祭主之申文、其状云、（中略）、停止延能神主無荘充文、他人耕作下種後、（中略）、号古作荘田重押時、年来荘田四町七反籠作不致弁」という記載があり、本文に掲げた同年五

月十四日付の大国荘司解を受けたことがわかる（平安遺文四―一二三九）。

そして、応徳二年六月九日付の「大神宮権神主荒木田延能解」には、「川合荘一町五反去年官物未済沙汰子細事」が明示されている（平安遺文四―一二四〇）

- (17) 平安遺文五―一二八五
この史料と関連する史料に同年と考えられている同年九月七日付の「備前守平忠盛請文」に「頼田荘訴事」云々と記載されている（平安遺文五―一二八六）。

- (18) 平安遺文七―三二三三
(19) 平安遺文六―二七五七
(20) 平安遺文六―二八七二
(21) 平安遺文四―一七八五―一七八七
(22) 平安遺文八―三九一六
(23) 『鎌倉遺文』第三卷、第二二五号文書（以下同様にて、鎌倉遺文三―一二一五というように略す）
(24) 鎌倉遺文五―二九一三
(25) 鎌倉遺文二―四七二
(26) 鎌倉遺文二―八九〇一
(27) 鎌倉遺文一〇―七一九九

この史料にみえる荘司政所職と荘司職と若干異なる「職」の名称が、正和二（一一三三）年二月 日付の「筑前安楽寺少别当信朝所帯所領屋敷注進状」にみえる。「荘司政所」「政所職」「荘司職」などがそれぞれ（平安遺文三―二四八〇八）、約六〇年余の期間の「職」の名称・表示は変化していたことが窺える（荘司政所職と荘司政所、政所職に違いがあり、荘司職に変化がみられる）。また、建長二（一二五〇）年の注進案と正和二年の注進状に明示されている。同じように佐嘉御荘での「荘司政所職」と「荘司政所」との違いはいかなる要因によるものかは、今後の「職」の問題点となろう。

- (28) 鎌倉遺文一八―一三五七二
(29)

- (30) 鎌倉遺文三五―二六七九六
- (31) 鎌倉遺文三五―二六八一五
- (32) 鎌倉遺文三八―二九六〇九
- (33) 『平安遺文』第三卷、第八一三号文書（以下同様にて、平安遺文三一八―一三というように略す）
- (34) 平安遺文三一―一三七
- (35) 平安遺文七―三一―一九
- (36) 『鎌倉遺文』第二〇卷、第七一九九号文書（以下同様にて、鎌倉遺文一〇―一七―一九九というように略す）
- (37) 鎌倉遺文一九―一四六―一二
- (38) 鎌倉遺文九―一六三九〇
- (39) 平安遺文三一―一〇二三
- (40) 平安遺文三一―一三七
- (41) 鎌倉遺文二六―一九六三七
- (42) 鎌倉遺文二四―一八二五七
- (43) 鎌倉遺文二六―一九六〇四
- (44) 鎌倉遺文二六―一九六〇四
- (45) この史料と関連する正応六（一二九三）年八月 日付の「鶴菊丸申状案」には
 東大寺領美濃国大井荘下司鶴菊丸申
 欲早任満寺充文旨、被停止則親末葉、補任当荘下司職事、
 （下略）
 という記載がそれである（鎌倉遺文二四―一八三〇七）。則新の末葉（末裔）まで下司職付帯を停止されることと、大井荘下司職は鶴菊丸に補任することが明示されている。
- (46) 鎌倉遺文二六―一九六三五
- (47) 『岩波日本史辞典』の「荘司」の項
- (48) 網野善彦『日本中世土地制度史の研究』（とくに、「美濃国」の二五二頁―二五四頁。これ以外にも「補論」の五四一頁でも、大田行義は「自ら荘司」下司となった」と言及している）
- (49) 『鎌倉遺文』第二六卷、第一九六三七号文書（以下同様にて、鎌倉

遺文二六―一九六三七というように略す）

- (50) 鎌倉遺文九―一六八九三
- (51) 鎌倉遺文一五―一六一六八
- (52) 鎌倉遺文一六―一二三五六
- (53) 奥野義雄「古代中世の雑掌をめぐる実態」（『鷹陵史学』第三八号）
 〈佛敎大学鷹陵史学会刊〉所収

（おくの よしお 非常勤講師）

二〇二二年十一月十三日受理